

令和 2 年 6 月 5 日現在

機関番号：17401

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K19822

研究課題名（和文）熊本地震における医療支援活動の振り返りと、今後への提言

研究課題名（英文）Review of medical support at Kumamoto Earthquake, and proposals for future

研究代表者

松井 邦彦（Matsui, Kunihiko）

熊本大学・病院・特任教授

研究者番号：80314201

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,900,000円

研究成果の概要（和文）：熊本地震の経験をもとに、九州各県の医師会員に対してアンケート調査を行った。送付総数10,000通の約30%から返答を得た。そのうち60%余りが診療所に属し回答者の13.6%が実際に支援に参加した経験があった。災害支援活動のための準備状況について、熊本の医師（K群）は、九州他県の医師（O群）と比べ、有意に高い割合で肯定的に答えていた。K群はO群と比べて、積極的に災害支援に参加する意思を示していた。これらは熊本地震を経験した影響による可能性がある。医師としての経験年数が浅いと、より積極的に支援に参加する可能性が示された。医師の災害時における支援行動に影響を与える可能性がある、様々な要因が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

様々な災害発生時に、医師に期待される役割は大きい。しかしながら、それらの特殊な状況下において、医師がどのような行動をとるかということについて、明らかではなかった。本研究では、医師自身の被災経験に加え、支援などの活動に参加する行動には、周囲の様々な要因が影響する可能性が伺われた。

本研究はアンケート調査であるため、得られた結果と実際の行動が異なる可能性は否定できない。しかしながら本研究の結果から、医師が災害時の支援も含め、医師の行動に影響を与える可能性がある、様々な要因が示された。今後予想される、様々な災害において、医師がこれまでもまして貢献できる可能性が示されたと思われる。

研究成果の概要（英文）：Based on the experiences of Kumamoto Earthquake in 2016, we have surveyed to the physicians belong to the Japanese Medical Association at Kyushu area. Among 10,000 30% of physicians responded and included. Among them, 60% worked at clinic base and 13.6% had experiences for deployment at disasters. About the self-estimation for the readiness to deployment at disaster, physicians at Kumamoto answered more positively than physicians at other areas. The experiences at Kumamoto Earthquake could have large impact for their responses. Additionally, young physicians showed more willingness to join the disaster deployment than senior physicians. These results could be interpreted that there are many factors those might have impact to the disaster deployment activities among physicians.

研究分野：一般内科、臨床疫学

キーワード：災害支援 医師 熊本地震 医師会

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

近年の日本において、様々な災害が発生している。その中で、医師の果たすべき役割は、診療行為のみならず、多岐にわたる。

### 2. 研究の目的

様々な災害発生時において、災害支援を含め、医師の行動に影響を及ぼす要因を明らかにする。

### 3. 研究の方法

熊本地震の経験をもとに、「熊本地震における医療支援活動の振り返りと、今後への提言」に関して、九州各県の医師会員にアンケート調査を行った。送付総数 10,000 通の約 30%から返答を得た。そのうち 60%余りが診療所に属していた。また回答者の 13.6%が実際に支援に参加した経験があった。

### 4. 研究成果

災害支援活動のための準備状況について、熊本の医師 (K 群) は、九州他県の医師 (O 群) と比べ、有意に高い割合で肯定的に答えていた。周囲のサポートについても、K 群は O 群と比べ、有意に高い割合で肯定的に答えていた。

支援の参加に重要である、影響を与えと思われる要因について、O 群は K 群と比べ 所属組織の方針、上司の理解、同僚の協力など、様々な周囲の要因について“とても思う”と答えた人の割合が多かった。自身の経験だけではなく、支援へ参加するためには、周囲の様々な要因から影響を受ける可能性が伺われた。

これからの支援活動に関して、自然災害については、地震を除き、K 群と O 群で、支援についての意思に明らかな違いを認められなかった。人為災害についても、テロを除いて K 群と O 群に回答の違いはなかった自然災害と比べ、人為災害への支援に参加する可能性は低いと思われた。今後、支援に行くことが可能な長さについて、3 日以内が 40%であり、一週間以内を加えると計 80%であった。これは実際に支援に行った経験がある人からの回答でも、3 日以内 37.4%、一週間以内までで 82.3%であり、大きな違いはなかった。多くの人たちには、最高一週間が現実的に支援可能な期間であると思われる。K 群は O 群と比べて、積極的に災害支援に参加する意思を示していた。自然災害の被災経験者の割合も高く、これらは熊本地震を経験した影響による可能性がある (図 1)。また医師としての経験年数が浅いと、より積極的に支援に参加する可能性が示された (図 1、図 2)。

災害時の支援に影響を与える可能性がある、様々な要因が示された。

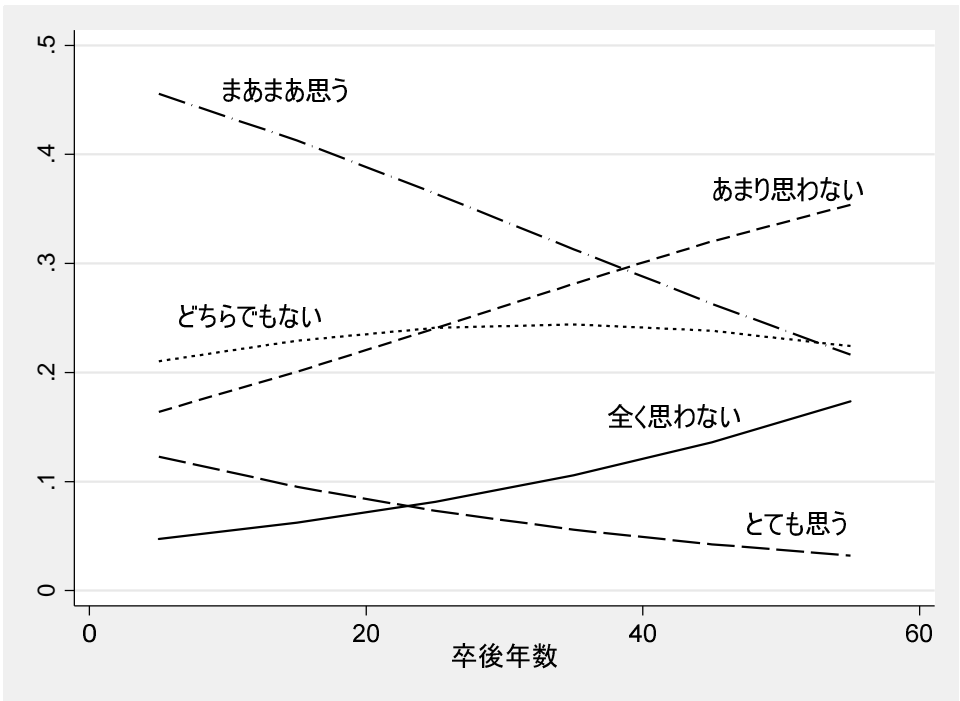


図1 “この調査後1年以内に災害が生じた場合、依頼されれば、私は災害支援へ参加するだろう” 卒後年数と、各回答を選択する可能性

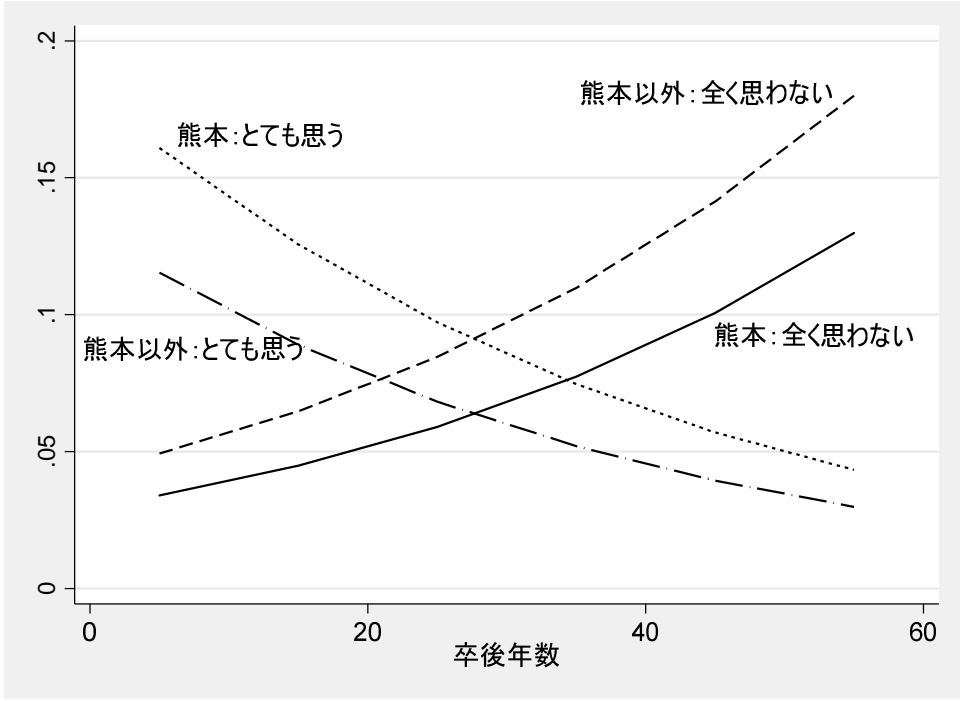


図2 “この調査後1年以内に災害が生じた場合、依頼されれば、私は災害支援へ参加するだろう” 熊本、熊本以外に分けて、“全く思わない”、“とても思う”と回答する可能性

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	谷口 純一  (Taniguchi Jun-ichi)  (20315302)	熊本大学・病院・病院教員    (17401)	